

氏 名	吉 岡 健 二 郎 よし おか けん じ ろう
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 79 号
学位授与の日付	昭 和 47 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	近代芸術学の成立とその課題

(主 査)

論文調査委員 教 授 井 島 勉 教 授 野 田 又 夫 教 授 辻 村 公 一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は序章と六章とより成っている。美や芸術の世界は、直接的体験の事実としてのみ与えられ、われわれの直観的な確信の中でのみ生きた姿を保っている。けれども或る体験が美的とか芸術とかという形容詞をもって特徴づけられて他の体験から正別されるとき、われわれはすでにその直接的体験そのものを言語的に固定化しているのである。したがって美学や芸術学という学問は、絶えざる流動の中に一種の固定性を持ちこみ、精神的實在性の世界を築いて行くことと考えられ、美や芸術という言葉によって意味される内容を、能うかぎり明確に定義し、体験的個別の世界と言葉の世界との間の結合性について反省してゆくことに努めなければならない。「芸術の学の問題について」と題された序論に詳述されているこのような思想は、本論文における理論的考察を一貫する基本的態度であり、著者独特の立場を物語るものと考えられる。

「近代芸術学の成立」と題する第一章においては、一般に近代芸術学の実質的確立者と見なされているフィードラーの著述を手がかりとしながら、ゼンパー、ヘットナー、ルーモールと溯ることによって、フィードラーの芸術論がけっして唐突に出現したものではなく、むしろ先行者の蓄積の上に立つものであることが明らかにされた。その際、個別的なものをいたずらに概念的普遍の世界に吸収解消せず、あくまで個を個としてその了解に努めようとする実証的精神の登場の問題や、古典芸術の絶対性に対する信仰の崩壊という背景の問題なども見のがされてはいない。このようにして捉えられた近代芸術学の系譜は、芸術を一種の言語と見なす芸術言語観の展開として眺められることが考察された(第二章「芸術と言語」)。ヘットナー、ゼンパー、リーグル、フィードラー、シュマルゾーらの場合はもとより、第二次世界大戦後に出版されたものの中で最も注目すべき芸術学上の著作として特に重要視されたフライの『比較芸術学』も、比較言語学の示唆に負うところが多大であったという事実が意味するように、いわゆる芸術言語観が精神科学としての芸術学の地歩を固める所以でもあったことが力説された。けだし著者の独創的な論点の一つである。

第三章は「現代芸術学の一傾向」と題されている。如上の経過をたどって成育した近代芸術学は、芸術が人間精神の自律的な一領域であることを確認し、唯美主義的思潮とからみあって、十九世紀以来の美術館隆盛の基盤となり、またこれがひいては現代の比較芸術学的研究の進展を促し、芸術の具体的個別的事実をひろく把捉しながら、同時にそれらを統一する根源的な人間精神の創造性を顧りみさせることになった。比較芸術学は現代人の心の中に再び超越的な価値目標としての美への要求を生ぜしめるに至っている。

第四章「芸術の意味」においては、絶えず流れ去ってゆく時間の中で或る恒常的なものを築こうとすることが芸術的行為にほかならないというフィードラーの思想は、ピンダーやフライの中にも受けつがれて生きている経緯が解明されている。このような芸術は、現代において、異常なまでに技術と接近し、ときには両者が混淆さしている観があるが、著者は、究極においては、技術が自然支配の力を推進してゆくものであるに対して、芸術は自然との共存においてのみ成立する現在の永遠化として区別さるべき事情を考察した（第五章「芸術と技術」）。現代の芸術学者や芸術家は、往々にして故意に美の問題を不問に附する傾向が強い。しかし本論文の著者は、「美と芸術」と題する第六章を設けて、特に現代における美と芸術の関係について論じ、現代芸術が再び超越的なものへの関心を深めてはいるものの、美は、芸術がこれを生み出し得るか否かを前もって決定し得るものではなく、人間が芸術制作それ自身に献身したとき、いわばその努力に対する恩寵であるかのように現われるものとして位置づけられている。

論文審査の結果の要旨

広義の美学は芸術学を含むものと考えて差支えないが、十九世紀における芸術流派のめざましい革新と対立と交替に遭遇して、伝統的な古典的思弁の美学は、芸術理解に関する重大な局面を迎え、あらたに狭義の美学とは区別さるべき独立した芸術学樹立の機運が醸成された。本論文の著者は、おびただしい文献を渉猟して近代芸術学の生成と展開の跡をたどりながら、芸術学の根本的な課題を解明することに力を致そうとする方法を採用している。

著者は、芸術活動が人間本性の内から如何に必然的に生じるかを追求して芸術の自律性を理論的に明確にすることによって芸術学を実質的に確立したのがフィードラーであると見なしている。かかる見方は特に新しいとはいえず、またフィードラーの理論自体はわが国においてもすでにかなり知られているが、彼の思想の独自性とその歴史的系譜および後の世代への影響の問題に関しては、従来、日本はもとより、ドイツにおいても必ずしも正確に跡づけられているとはいえない。

本論文の前半部においては、フィードラーの理論が、十九世紀初頭のルーモールに始まりヘットナー、ゼンパーらを経て蓄積された芸術理論の深化徹底であることが明らかにされている。そしてこれら一連の芸術理論がいずれも芸術を人間の表現活動と見なし、表現活動の代表たる言語活動との類比によって、芸術を一種の言語的活動として捉えている点を明確にしたのは、著者の独自な見解として高く評価することができる。

本論文の後半部においては、著者は、芸術の意味をたずねながら、これを技術および美と対比させつつ闡明しようと努めている。その際、著者は、芸術という人間の行為を、人間と自然、精神と物質という二元的対立の和解と考えているようであるが、かかる二元論の立場は、芸術の学に対する著者の立場にも現

われており、芸術の学を非合理的なるものとしての芸術と合理的なるものとしての学との間の、思索における和解として確立しようとする著者独特の芸術学的立場の樹立への志向がうかがわれる。

本論文の陳述は、芸術の本質追求という点に関しては、一面では、各学者の発言という歴史的事実をして語らしめるという消極的方法に過ぎるうらみがないではないが、他面においては、かかる方法とそれに基づく洞察は、芸術論上の発言がしばしば主観的独断や無批判的追従におちいりがちな弊害から救われながら、著者みずからの芸術学的思想の展望をひらくことにも役立っている。先行芸術学者の所論の解釈も概ね妥当であり、美術思潮史への配慮も正当になされているから、今後期待される狭義の美学的研究の深化によって、更に補強されるであろう。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。